

高齡期における「自宅以外の居場所」

北村 安樹子

<住まいの居心地と「自宅以外の居場所」>

多くの人は、介護が必要になったり、病気になった場合、介護施設や病院に通ったり、入所・入院してケアを受けるのがあたり前だと考えている。しかし、自宅でも必要なケアを受けられる環境が整っていくとしたら、あなたはどのような生活を送りたいと考えるだろうか。

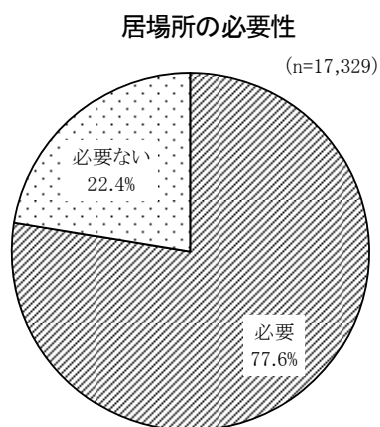
日本の医療・福祉政策において、病院や介護施設での生活を中心とするモデルから、自宅や地域生活を中心とするモデルへのシフトが進められている。自身が介護施設や病院に出向いて必要なケアを受けたり、医療・介護職による訪問サービスで必要なケアを受けることで、介護状態が重くなった場合にも、慣れ親しんできた住まいや生活環境から切り離されることなく生活を続けられるようになる。その結果、より長い期間を自宅で過ごすことになるため、住まいの居心地が今まで以上に求められる時代がくると考えられる。

一方で、近年、環境心理学の分野では、高齢者の生活環境において、物理的な生活空間としてだけでなく、意識の面でも自分の居場所だと感じられるような場所が重要であるといわれている(羽生 2008)。また、現在、わが国では1人暮らし高齢者や高齢者夫婦のみ世帯が大幅に増加しており、心身の衰えに伴って外出の機会が減少した高齢者は、社会とのかかわりが乏しくなりがちであるという指摘もある。このため、介護予防や孤立防止といった観点からみた場合、外出のきっかけになったり、社会とのかかわりを得られるような「居場所」を、自宅以外の場にもつことも重要になると思われる。

<自宅以外に落ち着ける・安心できる居場所>

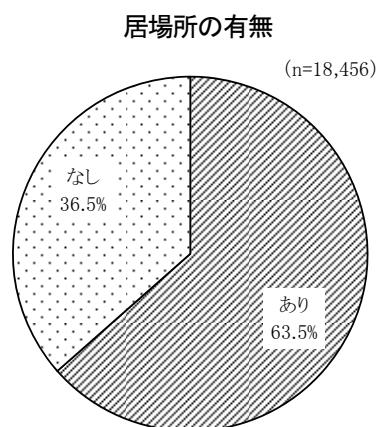
このようななか、香川県では、県内在住の高齢者3万人を対象として、自宅以外に落ち着ける・安心できる居

図表1 自宅以外に落ち着ける・安心できる



注：調査対象者は、県内の65歳以上の高齢者30,000人。
調査期間は2011年12月～2012年3月。無回答者は除外。
資料：香川県『高齢者居場所実態調査』2012年。

図表2 自宅以外に落ち着ける・安心できる



注・資料は図表1に同じ。

場所の存在についての意識調査を行った。この結果をみると、自宅以外に落ち着ける・安心できる居場所が「必要」と答えた人は77.6%で、「必要ない」(22.4%)と答えた人を大幅に上回った(図表1)。また、そのような居場所が実際に「ある」と答えた人は63.5%であったことから(図表2)、同県では両者の差である14.1%にあたる県内約3万6千人の高齢者が、自宅以外の居場所を必要と感じながらも、そのような場所がない状況にあるとの推計結果を発表した(推計値は、平成22年の国勢調査における県内の65歳以上の高齢者人口約25万3千人に基づく。同県ホームページ <http://www.pref.kagawa.lg.jp/choju/koureisha/kekka.shtml> より2012/11/29採録)。

＜自宅以外の居場所の種類＞

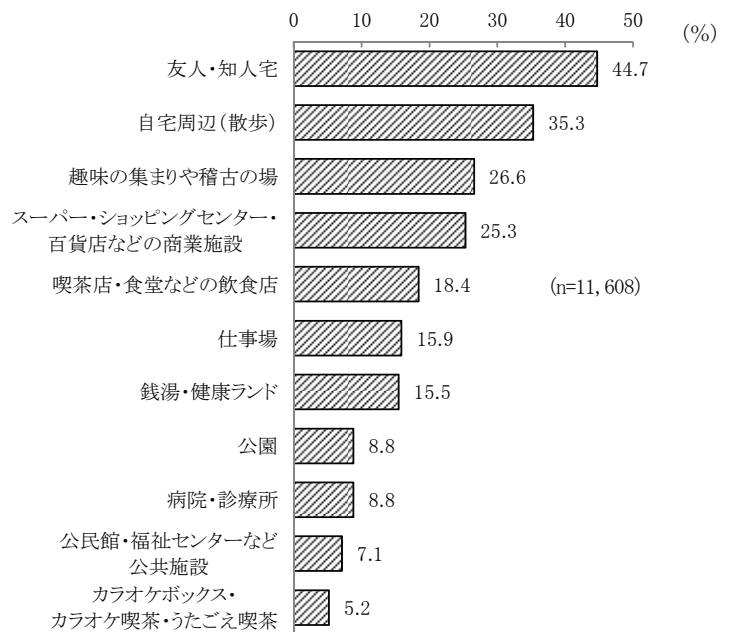
では、高齢者にとって、現在どのような空間が、落ち着きや安心を感じられる居場所になっているのだろうか。先の調査で、落ち着ける・安心できる居場所として最も多くあげられたのは「友人・知人宅」(44.7%)であり、「自宅周辺(散歩)」(35.3%)、「趣味の集まりや稽古の場」(26.6%)、「スーパー・ショッピングセンター・百貨店などの商業施設」(25.3%)などがこれに続いた(図表3)。公共施設や商業施設よりも、友人・知人宅というなじみの関係で結ばれた場所や、ふだんの散歩で歩く自宅周辺の何気ない空間をあげる人が多くなっている。

なお、健康状態がよくない人では「病院・診療所」(35.4%)、介護認定を受けている人では「デイサービス・デイケア」(53.7%)が、それぞれ最も多くあげられている(図表省略)。年齢や心身の状況によって落ち着きや安心を得られる場所は異なっており、虚弱化したり、介護が必要となった人の多くが落ち着きや安心を感じている居場所は、現状では医療・福祉施設空間になっていると考えられる。一方、「仕事場」をあげた人は全体では15.9%だが、仕事をもつ高齢者に限ってみると、約半数を占めて最も多い(図表省略)。仕事をもつ高齢者にとっては、職場空間(働いている場所)が落ち着きや安心を感じられる居場所として重要な位置づけを占めている様子うかがえる。

＜自宅以外の居場所に求められる条件＞

最後に、高齢者にどのような居場所があったら利用するのかをたずねた結果についてみる。最も多くあげられたのは「家から近い」(66.1%)であり、「料金が安い・無料」(54.9%)、「趣味やスポーツなど

図表3 自宅以外に落ち着ける・安心できる居場所の種類＜複数回答＞



注 : 回答者は、自宅以外に落ち着ける場所・安心できる居場所が「あり」と答えた人。5%未満の回答は省略。
資料 : 図表1に同じ。

が楽しめる」(37.9%)、「知り合いがいる」(34.0%)などがこれに続いている(図表4)。上位2位にあげられた「家からの近さ」と「料金の安さ」は、仕事の有無や健康状態等にかかわらず共通している(図表省略)。家から近い範囲に、安価で過ごせる場所が求められている。

近年、元気な高齢者の日中の居場所として、大都市では民間のスポーツクラブやカルチャーセンターなどの場が注目されているが、この調査でも「趣味やスポーツなどが楽しめる」は第3位にあげられている。なじみの知り合いと顔を会わせたり、興味・関心のある活動を行うために

外出することは、介護予防の面からだけでなく、自身に介護が必要になったり、家族の介護をする立場になって以降の生活でも、自身が安心や落ち着きを得る上で大切な機会になると考えられる。

<高齢期の居住デザインにおける住まいと「居場所」>

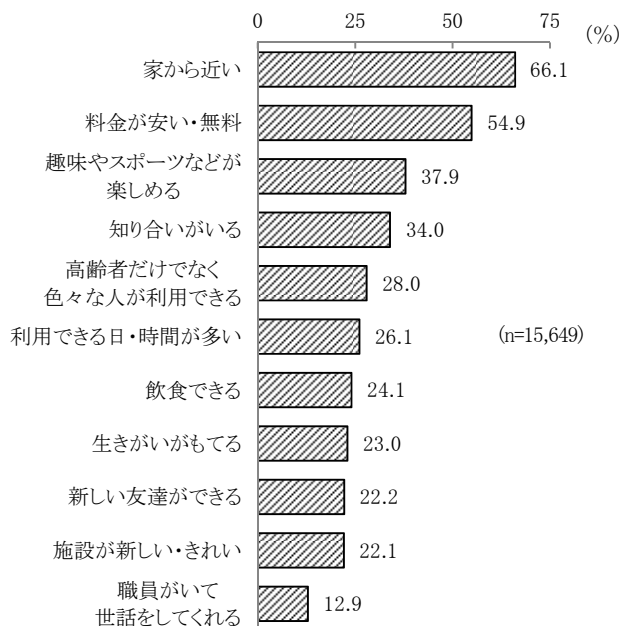
高齢期には、多くの人々が心身の衰えを経験し、仕事や家事など、家庭内外で担っていた多くの役割を失ったり、あるいはそれらからようやく解放される。家族の介護や死を迎えた後、はじめて1人暮らしを経験する人もいるだろう。生活環境やそれまで担ってきた役割の変化を経験するなかで、ときには外出や他者とのかかわりを苦痛に感じたり、自宅が居心地のよい、自分の居場所だとは感じられなくなることもあるかもしれない。

そうした環境の変化を乗り越えていく上で、在宅ケアの比重が増すこれからの時代は、生活空間である住まいを、ハード・ソフトの両面から、精神的に安らげる環境にすることがいっそう重要になる。同時に心身が衰えても足を運びたいような魅力的で居心地のよい「居場所」を、自宅以外の身近な場所にみつけておくことも、老後の大切な準備項目の1つになるだろう。また、老後の居住デザインにおいて、新たな住まい・施設への転居を考えている人であれば、居室の快適性や医療・介護環境に加えて、ロビーやラウンジなどの共用空間や周囲の身近な場所に、自身や家族が居心地のよい時間を過ごせる「居場所」が得られるかどうか、転居先を選ぶ際の重要な視点になると思われる。

<参考文献>

- ・羽生和紀, 2008, 『環境心理学』サイエンス社。

図表4 利用しようと思う居場所の条件<複数回答>



注 : 設問文は「どのような居場所があったら利用しようと思いますか
無回答は除外。「その他」(2.2%)は省略。

資料 : 図表1に同じ。